

# 戲作者

国枝史郎

青空文庫



## 初対面

「あの、お客様でございますよ」

女房のお菊きくが知らせて来た。

「へえ、何人だれだね？ 蔦屋つたやさんかえ？」

京きょう伝でんはひよいと眼を上げた。陽あたりのいい二階の書齋で、

冬ふゆのことで炬燵こたつがかけてある。

「見たこともないお侍様で、滝沢たきざわ様とか仰おつ有しやいましたよ。是

非ともお眼にかかりたいんですって？」

「敵討ちじやあるまいな。俺は殺される覚えはねえ。もつともこれ迄草双紙の上じや随分人も殺したが……」

「弟子入りしたいって云うんですよ」

「へえこの俺へ弟子入りかえ？ 敵討ちよりなお悪いや」

「ではそう云つて断わりましょうか？」

「と云う訳にも行かないだろう。かまうものか通しつちめえ」

女房が引つ込むと引き違いに一人の武士が入つて来た。大おおたぶ

髻ぎに黒紋付、年恰好は二十五六、筋肉逞しく大兵肥満、威圧す

るような風采である。小兵で瘦せぎすで蒼白くて商人まる出しの京伝にとつては、どうでも苦手でなければならぬ。

「手前滝沢清左衛門せいざえもん、不束者ふつつかもものにござりますが何卒なにとぞ今後お見

知り置かれ、別してご懇意にあずかりたく……」

「どうも不可いけぬえ、固かたくるしいね。私あつしにやアどうにも太刀打ち出来

ねえ。へいへいどうぞお心安くね。お尋ねにあずかりやした山東庵京伝、正に私でごせえやす。とこうバラケンにゆきやしよう。

アツハハハハどうでげすな？」

「これはこれはお手軽のご挨拶、かえって恐縮に存じます」

「どう致しまして、あべこべ反対だ、恐縮するのは私わっちの方で。……さて、

お訪ねのご用の筋は？ とこう一つゆきやしようかな」

「は、その事でござりますが、手前戯作者志願でござって、ついでには厚顔のお願いながら、ご門下の列に加わりたく……」

「へえ、そりやア本当ですかい？」

「手前お上手は申しませぬ」

「それにしちやア智慧がねえ……」

「え？」と武士は眼を見張る。

「何を、口が汙りやした。それにしても無分別ですね。見れば立派なお侍様、農工商の上に立つ仁だ。何を好んで幫間などに……」

「幫間？」と武士は不思議そうに、

「戯作者は幫間でござりませうか？」

「人気商売でげすからな。幫間で悪くば先ず芸人。……」

ツルリと京伝は頤おとがいを撫でる。自分で云ったその言葉がどうやら自分の気に入ったらしい。

「手前の考えは些ちと違います」

「ハイハイお説はいずれその中ゆつくり拝聴致すとして、第二に戯作というこの商売、岡眼で見たほど楽でげえせん」

「いやその点は覚悟の前で……」

「ところで、これ迄文のようなものを作ったことでもござんすかえ？」

「はっ」と云うと侍は、つと懐中へ手を入れたが、取り出したのは綴じた紙である。

「見るにも耐えぬ拙作ながら、ほんの小手調べに綴りましたもの、ご迷惑でもござりませうがお隙の際に一二枚ご閲読下されば光栄の至<sup>いたり</sup>。……」

「へえ、こいつア驚いた。いやどうも早手廻しで。ぜっぴ江戸ツ子はこうなくちやならねえ。こいつア大きに気に入りやした。はあ題して『壬生<sup>みぶ</sup>狂言』……ようごす、一つ拝見しやしよう。五

六日経つておいでなせえ」

で、武士は帰って行つたが、この武士こそ他ならぬ後年の曲亭馬琴であつた。

「来て見れば左程でもなし富士の山。江戸で名高い山東庵京伝も思つたより薄っぺらな男ではあつた」

これが馬琴の眼にうつつた山東京伝の印象であつた。

「変に高慢でブツキラ棒で愛嬌のねえ侍じゃねえか。……第一体が大き過ぎらあ」

京伝に映つた馬琴の態度も決して感じのいいものではなかつた。

さも面倒だというように、馬琴の置いて行つた原稿を、やおら京伝は取り上げたが、面白くもなさそうに読み出した。しかし十



枚と読まない中に彼はすっかり魅せられた。そうして終しまい迄読んでしまうと深い溜息さえ吐いたものである。

「こいつアどうも驚いたな。いや実に甘うまいものだ。この力強い文章はどうだ。それに引証の該博さは。……この塩あんばい梅すすむで進歩としたら五年三年の後が思い遣られる。まず一流という所だろう。……三十年五十年経った後には山東京伝という俺の名なんか口にする者さえなくなるだろう。……これこそ本当に天うまれながら成の戯作者とでもいうのであろう」

こう考えて来て京伝はにわかにながら心寂しくなり焦燥をさえ感じて来た。とはいえ嫉妬は感じなかった。むしろ馬琴を早く呼んで、褒め千切りたくてならないのであった。

手錠五十日

あす  
明日とも云わず其日そのひそつこく即刻、京伝は使いを走らせて馬琴を家へ

呼んで来た。

「滝沢さん、素敵でげすなア」

のつけから感嘆詞を浴びせかけたが、

「立派なものです。驚きやした。悠に一家を為して居りやす。京伝黙って頭を下げやす。門下などとは飛んでもない話。組合になりやしよう友達になりやしよう。いやいや私わっちこそ教えを受けやしよう」

こんな具合に褒めたものである。

馬琴は黙って聞いていたが、別に嬉しそうな顔もしない。大袈裟な言葉をのべつ幕無しふんだんに飛び出させる京伝の口を、寧ろ皮肉な眼付きをして、じろじろ見遣るばかりであつた。

「それはさておきご相談……」

と、京伝は落語でも語るようにペラペラ軽快に喋舌しゃべつて来たのを、ひよいとここで横へ逸らせ、

「どうぞでげすな滝沢さん、私の家へ来なすつては。一つ部屋へ机を並べて一諸に遣ろうじやごわせんか」

「おおそれは何よりの事。まこと洵参つて宜敷ゆうござるかな」

馬琴はじめて莞爾とした。

「ようござんすともおいでなせえ。明日あすともいわず今日越しなせ

え。……おい八蔵や八蔵や、お引つ越しの手伝いをしな」

手を拍つて使僕こものを呼んだものである。

馬琴の父は興蔵こうぞうといつて松平信成のぶなりの用人であつたが、馬琴

の幼時死亡した。家は長兄の興旨こうしが継いだが故あつて主家を浪人

した。しかし馬琴だけは止まつて若殿のお相手をしたものである。

しかるに若殿がお多分に洩れず没分わからずや暁漢の悪童で馬琴を撲つたり

叩いたりした。そうでなくてさえ豪毅一徹清廉潔白の馬琴である。

憤然として袖を払い、

木がらしに思い立ちけり神の旅

こういう一句を壁に認めると、飄然と主家を立ち去つてしまつた。十四歳の時である。

「もうもう宮仕えは真平だ」

馬琴は固く決心したが、しかしそれでは食って行けない。止むを得ず戸田侯の徒士かちとなつたり旗本邸を廻り歩いたり、突然医家を志し幕府の典医山やまもと本宗英そうえいの薬籠やくろう持ちとなつて見たり、そうかと思うと儒者を志願し亀田鵬ほうせい斎さいの門をくぐつたり、石川五山に従つて柄にない狂歌を学んだり、橘たちばな千蔭ちかげに書を習つたりしたが、成功することは出来なかつた。こうして最後に志したのが好きの道の戯作者であつたが、ここに初めて京伝によつてその天才を認められたのである。——馬琴この時二十四歳、そうして京伝は三十歳であつた。

版元蔦屋重三郎がある日銀座の京伝の住居をさも忙しそうに訪れた。

「おおこれは耕書堂さん」

「お互いひどい目に逢いましたなあ」

蔦屋は哄然と笑ったものである。

幕府施政の方針に触れ、草双紙が絶版に附せられたのは天明末年のことであつた。恋川春町、芝全交、平沢喜三二と

云つたような当時一流の戯作者達はこの機会に失脚し、京伝一人の天下となり大いに氣持を宜くしたものであるが、寛政二年の洒落本禁止令は京伝の手足を奪つてしまつた。

と云つてこれ迄売り込んだ名をみすみす葬つてしまふのは如何

にも残念という所から版元蔦屋と相談した末「教訓読本」と表題を変え、内味は同じ洒落本を蔦屋の手で発行した。思惑通りの大当りで増版々々という景気であつたが、果然鉄槌は天下つた。利益に眩み上を畏れず下知げちを犯したは不屈というので蔦屋は身上半減で闕所、京伝は手錠五十日と云う大きな灸をすえられたのである。

「さて」と蔦屋は居住居を直し京伝の顔色を窺つたが、

「身上半減でこの蔦屋もこれ迄のようにはゆきませんが、しかしこのまますた廃れてしまつては商売冥利死んでも死なれません。そこでご相談に上りましたが、今年もいよいよ歳暮くれに逼り新年はるの仕度を致さねばならず、ついては洵に申し兼ねますが、お上のお達し

に逆らわない範囲で草双紙をお書き下さるまいか。」

余儀ない様子に頼んだものである。

京伝は腕を組んで聞いていたが、早速には返辞もしなかった。

——彼はすっかり懲りたのである。五十日の鉄の手錠は彼には少し重すぎた。いつそ戯作の足を洗い小さくともよいから店でも出し、袋物でも商おうかしら？ それに今こそ人気ではあるがいつ落ちないものでもなし、それにもし今度忌避に触れたら牢に入れられないものでもない。あぶないあぶないと思つていたのであつた。

「しかし蔦屋も気の毒だな。身上半減は辛かろう。日頃剛愎であるだけにこんな場合には尚耐えよう。それに年来蔦屋には随分



俺も厄介になった。ここで没義道もぎどうに見捨ることも出来ない」  
で、京伝は云ったものである。

「ようござす、ひとつ書きやしよう」

### 戯作道精進

「さあ忙しいぞ忙しいぞ」

蔦屋重三郎の帰った後、京伝は大袈裟にこう云いながら性急に机へ向かったが、性来の遅筆はどうにもならず、ただ筆を噛むばかりであった。

そこへのつそりと入って来たのは居候の馬琴である。

「あ、そうだ、こいつア宜いい」

何と思つたか京伝はポンと筆で机を打つたが、

「滝沢さん、頼みますぜ」

藪から棒に云つたものである。

「何でござるな」と云いながら、六尺豊かの偉大な体をずんぐりとそこへ坐らせたが、馬琴は不思議そうに眼をパチつかせる。

「偉いお荷物を背負い込んでね、大あぶあぶの助け船でさあ。実は……」と京伝は蔦屋との話をぎつと馬琴へ話した後、

「新年はると云つても逼つて居りやす。四編はどうでも書かずばなるまい。とても私の手には合わわず、さりとて今更断りもならず、四苦八苦の態たらくでげす。——いかがでげしよう滝沢さん、代作をなすつちやア下さるまいか？」

とうとう切り出したものである。

「代作？」と云つて渋面を作る。

馬琴には意味が呑み込めないらしい。

「左様、代作、不可いけませんかえ？」

「……で、筋はどうなりますな？」

「ああ筋ですか、胸三寸、それはここに蔵して居ります」

ポンと胸を叩いたが、それから例の落語口調でその「筋」なるものを語り出した。

黙つて馬琴は聞いていたが、時々水のような冷い笑いを頬の辺りへ浮べたものである。

聞いてしまうと軽く頷き、

「よろしゅうござる、代作しましょう」

「では承知して下さるか」

「ともかくも筆慣らし、その筋立てで書いて見ましょう」

「や、そいつア有難てえ。無論稿料は山分けですぜ」

しかしそれには返辞もせず、馬琴はノツソリ立ち上ったが、やがて自分の机へ行くと、もう筆を取り上げた。

筆を投ずれば風を生じ百言たちどころ即座いわゆるに発するというのが所謂

馬琴の作風であつて、推敲反覆の京伝から見れば奇蹟と云わなければならなかつた。

その日から数えて一月ばかりの間に、実に馬琴は五編の物語をいと易々と仕上げたのである。しかも京伝の物語った筋は刺身の

ツマほども加味して居らず大方は馬琴の独創であつて、これが京伝を驚かせもし又内心恐れさせもしたが、苦情を云うべき事柄ではない。で、黙つて受取つて自分の綴つた二編を加え蔦屋の手へ渡したのである。

七編の草双紙は初春早々山東京伝の署名の下に蔦屋から市場へ売出されたが、やはり破れるわような人気を博し今度は有司にも咎

められず、先ずは大々の成功であつたが、これを最後に京伝は、

草双紙、洒落本から足を抜き、教訓物や昔咄や「実語じつご教きょう稚なこ

講釈こうしゃく」うしやくこう云つたような質実じみな物へ、努めて世界を求めて行

つた。これは手錠に懲りたからでもあるが、又馬琴の大才を恐れ、

同じ方面で角かくちく逐しゆくすることの、不得策であることを知つたからで

もある。

その馬琴はそれから間もなく、蔦屋重三郎に懇望され、京伝の食いそろう客から一躍して、耕書堂書店の番頭となったが、これはこの時の代作が稀代の成功を齎もたらしたからであつた。

「蔦屋へ来て何より嬉しいのは自由に書物ほんが読まれることだ」

馬琴はこう云つて喜んだが、それはさすがに書店だけに、耕書堂蔦屋には文庫があり、戦記や物語の古書籍が豊富に貯えられていたからである。馬琴は用事ひまひまの隙々にそれらの書物を涉獵し、飽無き智慧慾を満足させた。

戯作者としては彼の体が余りに偉大であつたので、冗談ではなく誠心まごころから相撲になれと進める者があつたが彼は笑つて取り合

わなかつた。その清廉の精神と堂々の風彩を見込まれて、蔦屋の親戚の遊女屋から入婿になるよう望まれたが、馬琴は相手にしなかつた。

側眼もふらず戯作道を彼は精進したのである。

曲亭馬琴と署名して「春の花虱しらみの道行」を耕書堂から出版だしたのは、それから間もなくのことであつたが、幸先よくもこの処女作は相当喝采を博したものである。

これに氣を得て続々と馬琴は諸作を発表したが、折しも京伝は転化期にあり、他に目星しい競争者もなく、文字通り彼の一人舞台であり、かつは名文家で精力絶倫、第一人者と成つたのは理の当然と云うべきであろう。

しかし間もなく競争者は意外の方面から現われた。

じっぺんしゃいづく

十返舎一九、しきていさんば式亭三馬が、滑稽物をひっさげて、戯作界へ

現われたのは馬琴にとつては容易ならない競争相手といつてよからう。

### 物を云う据風呂桶

それはある年の大晦日、しかも夕暮のことであつたが、新しい草双紙の腹案をあれかこれかと考えながら、雑踏の深川の大通りを一人馬琴は歩いてゐた。

と、ボンと衝つきあた突つた。

「ああ痛！」と思わず叫び俯向いてゐた顔をひよいと上げると、



据風呂桶がニヨツキリと眼の前に立っているではないか。

「えいべらぼう 篋棒、気を付けろい！」

桶の中から人の声がする。

「桶を冠っているからにや、眼のみえねえのは解り切っていらあ。何でえめくら盲目に衝突たりやがって。ええ気をつけろい気をつけろい！」

莫迦に威勢のよい捲き舌で桶の中の男は罵のし詈つたが、馬琴にはその声に聞き覚えがあった。それに白昼の大晦日に、深川の通りを風呂桶を冠って横行闊歩する人間は、あの男以外には無いはずである。

そこで馬琴は声を掛けて見た。

「おい貴公十返舎ではないか」

「え？」

桶の中の男は酷く驚いた様子であつたが、にわかにゲラゲラ笑い出し、

「解つたぞ解つたぞ声に聞き覚えがある。滝沢氏でござろうがな。アツハハハハ、奇遇々々。いかにも手前十返舎一九、胃かぶとを脱いでいぎ見参！ ありやありやありやありや、ソレソレソレソレ」

掛声と一緒に据風呂桶を次第に高く持ち上げたが、ヌツと裾から顔を覗かせると、

「一夜明ければ新玉の年、初湯を立てようと存じやしてな、風呂桶を借りて参りやした。そこで何と滝沢氏、明日あすは是非とも年始

がてら初湯を試みにお出かけ下され。確しかとお約束致しやした。し  
からばこれにて、ハイハイご免。ありやありやありやありや、お  
隠れお隠れ、血塊々々、ソレソレソレソレ」

ふたたびスツポリ桶を冠るとやがてユサユサと歩き出した。

後を見送った曲亭馬琴は、笑うことさえ出来なかつた。あまり  
に一九の遣り口が彼とかけ離れているからである。

「いやどうも呆れたものだ」

馬琴は静かに歩きながら思わず口へ出して呟いた。

「洒落と奇矯でこの浮世を夢のように送ろうとする。果してそれ  
でよいものだろうか？ 今江戸に住む戯作者という戯作者、立派  
な学者の太田蜀山さえ、そういう傾向を持っている。一体これで

よいものだろうか？ どうも自分には解らない」

馬琴は何となく寂しくなった。肩を落とし首を垂れ、うそ寒そうに足を運ぶ。

「京伝は俗物、一九は洒落者、そうして三馬は小皮肉家。……俺一人彼奴らと異う。きやつこれは確かに寂しいことだ。しかし」と馬琴は昂然と、その人一倍大きな頭を、元気よく肩の上へ振上げたが、  
「人は人だ、俺は俺だ！俺はやっぱり俺の道を行こう。仁義礼智……教訓……指導……俺は道徳で押して行こう。俺の目的は濟世救民だ！」

彼は足早に歩き出した。何の不安も無さそうである。

その翌日のことであつたが、物堅い馬琴は約束通り、儀礼年始

の正装で一九の家を訪れた。

「これはこれは滝沢氏、ようこそおいで下されやした。何はともあれ初湯一風呂さあさあザツとお召しなさりませ。湯加減も上々吉、湯の辞儀は水とやら十段目でいって居りやす。年賀の挨拶もそれからのこと、へへへへ、お風呂召しましょう」

一九は酷ひどくはしやぎ廻り無闇と風呂を勧めるのであった。

東海道中膝栗毛

「左様でござるかな、仰せに従い、では一風呂いただきましようかな」

馬琴は喜んで立ち上り、一九の案内で風呂場へ行つたが、やが

て手早く式服を脱ぐと、まず手拭で肌を湿し、それから風呂へ身を沈めた。些か湯加減は温いようである。

「これは早速には出られそうもない。迂濶<sup>うっか</sup>り出ると風邪を引く。ちとこれは迷惑だわえ」

心中少しく閉口しながら馬琴はじつと沈んでいたが、銭湯と異い振舞い風呂、いつ迄漬かっても居られない。で手拭で体を拭き、急いで衣装を着けようとした。どうしたものか衣類がない。式服一切下襦袢までどこへ行ったものか影も形もない。

驚いた馬琴が手を拍つと、ノツソリ下男が頭を出したが、

「へえ、お客様、何かご用で？」

「私<sup>わし</sup>の衣類はどこへ遣ったな？」

「へえ、わたくし私知りましねえ」

「ご主人はどうなされた？」

「あわててどこかへ出て行きやした」

「何、出て行った？ 客を捨てか？」

「珍しいことでごぜえません」

「寒くて耐らぬ。代わりの衣類は無いか」

「ふるぬのこ古布子ならござりますだ」

「古布子結構それを貸してくれ」

下男の持って来た布子を着、結び慣れない三尺を結び、座敷の真中へぼつねんと坐り、馬琴は暫らく待っていたが、一九は容易に帰宅しない。

その中元旦の日が暮れて、燈とも火しびが家毎ともに燈ともるようになった。

その時ようやく門口が開き、一九は姿を現わしたが、見れば馬琴の式服を臆面もなく纏っている。

「アツハハハハ」と先ず笑い、

「式服拝借致しやした。おかげをもつて近所合壁年始廻りが出来やした。いや何式服というものは、友達一人持って居れば、それで萬端役立つもので、決して遠慮はいりやせん、借りて済みますが得策でげす」

自分が物でも貸したように平然として云ったものである。

呆れた馬琴が何とも云わず、程経て辞して帰ったのは、笑止千萬のことであつた。



一九の父は駿府の同心、一生不遇で世を終わつたが、それが一九に遺伝したか、少年時代から悪賢く、人生を僻んで見るようになった。独創の才は無かったが、しかし一個の奇才として当代の文壇に雄飛したことは、又珍しいと云うことが出来よう。

真夏が江戸へ訪れて来た。

観世音かんぜおん

四萬三千日、草市、

盂蘭盆会うらぼんえも

瞬間またたくま

に過ぎ土用の

丑の日にも近くなつた。毎日空はカラリと晴れ、市中はむらむらと蒸し暑い。

軽い歯痛に悩まされ、珍しく一九は早起きをしたが、そのままフラリと家を出ると日本橋の方へ足を向けた。

橋上に佇んで見下せば、河の面てには靄立ち罩め、纜こつた船も未だ醒めず、動くものと云えば無数の鷗が飛び翔け巡る姿ばかりである。

「ああすがすがしい景色ではある」

いつか齒痛も納まつて、一九の心は明るくなっていた。

「ゆくものは斯かくの如ごとし昼夜をわかつた、支那の孔子様は云つたというが、全く水を見ていると心持ちがが異つて来る。……今流れている橋の下の水は、品川の海へ注ぐのだが、その海の水は岸を洗い東海道をどこ迄も外国迄も続いている。おおマア何と素晴らしいんだらう」

いつもに似ない真面目な心持で、こんな事を考えている中、ふ

と旅情に誘われた。

「夏の東海道を歩いたら、まあどんなにいいだろうなあ」

彼はフラフラと歩き出した。足は品川へ向かって行く。

あたり

四辺を見れば旅人の群が、朝靄の中をチラホラと、自分と前後して歩いて行く。駕籠で飛ばせる人もあり、品川宿の辺りからは道中馬も立つと見えて、竹に雀はの馬子唄に合わせ、チャリンチャリンと鈴の音が松の並木に木精こだまを起こし、いよいよ旅情をそそるのであった。

川崎、神奈川、程ヶ谷と過ぎ、戸塚の宿へ入った頃には、日もとつぷりと暮れたので、笹屋はたごという旅籠へ泊ったが、これぞ東海道五十三次を三月がかりで遊び歩いた長い旅行の第一日であり、

一九の名をして不朽ならしめた、「東海道中膝栗毛」の、  
モデルとなるべき最初の日であつた。

剣道極意無想の構え

「もう俺も若くはない。畢世の仕事、不朽の仕事に、そろそろ取りかかる必要がある」

こういう強い決心の下に「八犬伝」に筆を染めたのは、文化十一年の春であつた。

この頃の馬琴の人気と来ては洵に眼覚しいものであつて、戯作界の第一人者、誰一人齒の立つ者はなく、版元などは毎日のように機嫌伺いに人をよこし、  
狷介孤嶂けんかいこしょうの彼の心を努めて迎えよ

うとした程である。

「八犬伝」の最初の編が一度市場へ現われるや、萬本即座たちどころに売り尽くすという空前の売れ行きを現わした。書齋の隣室へ朝から晩まで画工と彫刻師とが詰めかけて来て、一枚書ければ一枚だけ絵に描いて版に起こし、一編集まれば一編だけ、本に纏めて売り出すのであつた、それでも読者は待ち兼ねて矢のような催促をするのであつた。

こうして四編を出した時、馬琴はにわかに行き詰まつた。

「俺は身分は武士であつたが、何故か武芸を侮つてこれ迄一度も学んだことがない。武芸を知らずに武勇譚を書く、これは行き詰るのが当然である」

こう考えて来て当惑したが、そこは精力絶倫の馬琴のことであつたから、決して挫折はしなかつた。当時の劍客あさりまたしちろう 浅利又七郎へにえ 贅を入れて門下となり、劍を修めようとしたのである。

馬琴の健気けなげなこの希望のぞみを浅利又七郎は受け納いれた。

「先ず型を習うがよい」

又七郎はこう云つて自身手をとつて教授した。型の修行が積んだ所で又七郎は又云つた。

「極意に悟入する必要がある。無念無想ということだ」

「無念無想と申しますと？」

馬琴にはその意味が解らなかつた。

「敵に向つて考えぬことだ」

「全身隙だらけにはなりませんまいか？」

「そこだ」と又七郎は頷いたが、

「全身これ隙、それがよいのだ」

「ははあ左様でございましょうか」

「全身隙ということは隙が無いと同じことだ」

「ははあ」と馬琴は眼を丸くする。

「守りが乱れて隙となる。最初から体を守らなかつたら、隙の出

来よう筈はない」

「あつ、成程、これはごもつとも」

「さて、剣だ、下段に構えるがよい。相手の腹を狙うのだ。切るのではない突き通すのだ。眼は自分の足許を見る。そうしてじつ

と動かない。敵の刀が自分の体へヒヤリと一太刀触れた時グイと剣を突き出すがよい。肉を斬らせて骨を斬る。間違つても合討ちとはなろう。打ち合わす太刀の下こそ地獄なれ身を捨てこそ浮かむ瀬もあれ。一刀流の極意の歌だ。貴殿は中年も過ぎして居る。今更剣を学んだ所で到底一流には達しられぬ。無駄な時間を費やさぬがよい」

「御教訓かたじけのう存じます」

馬琴は礼を云つて引き退つたが、心中多少不満であつた。極意についての解釈も、解つたようで解らなかつた。従つて「八犬伝」の続稿も、書き進むことが出来なかつた。憂鬱の日が続いたのである。



しかし間もなく意外な事件が馬琴の身上に降つて湧いた。そうしてそれが馬琴の心を、ガラリ一変させたものである。

ある夜、馬琴はただ一人、柳原の土手を歩いていた。

と、一人の若侍が、暗い柳の立木の陰から、つと姿を現わしたが宗十郎頭巾で顔を包み黒紋付を着流している。

馬琴は気味悪く思いながらも、引き返すことも出来なかつたので、往來の端を足音を忍ばせ、しとしと先へ歩いて行つた。すると、ひそかに心配していた通り、覆面の武士が近寄つて來た。スルリ双方擦れ違つた途端、キラリと劍光が閃いた。

「抜いたな」と馬琴は感付いたが、却も走りもしなかつた。かえつて彼は立ち止まつたのである。それから靜かに刀を抜くと、そ

れを下段に付けたまま悠然と体の方向むきを変え、グルリ背後うしろへ振り向いて辻斬の武士と向かい合つた。

「うむ、ここだな、無念無想！」

馬琴は心で呟くと、故意わざと相手の姿は見ずに自分の足許へ眼を注げた。臍下丹田に心を落ち付け、いつ迄も無言で佇んだ。

相手の武士もかかつて来ない。青眼に刀を構えたまま、微動をさえもしないのである。

八犬伝書き進む

その時武士の囁く声が馬琴の耳へ聞こえてきた。

「驚き入つたる無想の構え。合討ちになるも無駄なこと、いざ刀

をお納め下され」

そういう言葉の切れた時パチリと鏝鳴りの音がした。武士は刀を納めたらしい。しかし馬琴は動かなかつた。じつと刀を構えたまま不動の姿勢を崩そうともしない。返辞をしようともしなかつた。声の顫えるのを恐れたからである。

と、また武士の声がした。

「拙者は武術修行の者、千葉周作成政と申す。ご姓名お聞かせ下さるまいか」

しかし馬琴は返辞をしない。無念無想を続けている。

「誰人どなたに従ついて学ばれたな？ お聞かせ下さることになりますまい

かな？」

武士の声はまた云った。

「拙者師匠は浅利又七郎」

馬琴は初めてこう云ったがその声は顫えていなかった。この時彼の心持は水のように澄み切っていたのである。

「ははあ、浅利殿でござったか。道理で」と武士は呟くように云った。

「今夜は拙者の負けでござる。ご免」と云う声が聞こえたかと思うと、立ち去るらしい足音がした。

その足音の消えた時、馬琴は初めて顔を上げた。武士の姿はどこにも見えない。そこには闇が有るばかりである。

自分の家へ帰って来ると、直ぐに馬琴は筆を執った。犬飼現八

の怪猫退治——八犬伝での大修羅場は、瞬間にして出来上ったが、爾来滞ることもなく彫大極まる物語りは、二十年間書きつづけられたのである。



# 青空文庫情報

底本：「国枝史郎伝奇全集 卷五」未知谷

1993（平成5）年7月20日初版発行

初出：「サンデー毎日」

1925（大正14）年4月1日春季特別号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：阿和泉拓

校正：湯地光弘

2005年5月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 戯作者

国枝史郎

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>